



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ソクラテスと意志の弱さ（一）：aristoles, Ethica Nicomachea, VII 3
Author(s)	田中, 享英
Citation	北海道大學文學部紀要, 30(2), 1-24
Issue Date	1982-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33461
Type	departmental bulletin paper
File Information	30-50_P1-24.pdf



ソクラテスと意志の弱さ (一)

—— Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, VII 3 ——

田 中 亨 英

ソクラテスと意志の弱さ (一)

— Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, VII 3 —

田 中 亨 英

意志の弱い人とは、或ることを悪いと知りつつやってしまう人である。ところが、他方、ソクラテスによれば、なにびとといえども悪いと知りつつこれをなすことはない。とすると、意志の弱い人とか、意志の弱い行為とかは、実際には存在しないのか。それとも、ソクラテスの考えが間違っていたのか。

アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』第七卷第三章で、この問題を取り上げて考察している。アリストテレスの解答は、結局、意志の弱い人は、自らの行為が悪い行為であるということを、たしかに或る意味では知っているが、本当には知っていない、と結論しているように思われる。つまりかれは、意志の弱さというものを事実として認め、かつソクラテスの主張の正しさをも認めて、これらを同時に説明するために、「知っている」というのにも二つの意味があることを指摘したのである。では、それはどういうことか。特に、「本来の意味で知識であると考えられるものが現存するのに意志の弱さが生ずることとはなく、またこのような知識が情念によって引き廻されることがない」(一四七b一五—一七)とかが結論するとき、その「本来の知識」とは何か。これを明らかにすることが小

論の課題である。

さて、問題の考察にとりかかるに当って、まず、考察の対象となるものについて、つまりソクラテスの主張と、意志の弱さといわれるものとの各々を、できるだけ正確に見さだめておく必要がある。

まず、「意志の弱さ」については、アリストテレスがこれに関する一般の人々の意見として列挙しているものを、そのままここに掲げておくのがよいと思われる。

「(一) 意志の強さとか我慢強さは、善良なもの、賞讃されるべきものに属し、意志の弱さ(*akrasia*)とか情弱は、劣悪なもの、非難されるべきものに属すると、一般に考えられている。そして、(二) 意志の強い人とは分別の示すところに踏みとどまる人のことであり、意志の弱い人とは分別の示すところから逸脱する人である。つまり、(三) 意志の弱い人は、劣悪なことであると知りながら情念のゆえにこれを為すが、意志の強い人は、その欲望が劣悪なものであると知ると、分別のゆえにこれを却ける。

さらに、(四) 節制的な人(*sophrosune*)は意志が強くかつ我慢強いと考えられるが、逆に意志の強い人や我慢強い人はすべて節制的であるかという点、一部の人々はこれを認めるが他の人々は否定する。そして、一部の人々は放埒な人(*akratia*)と意志の弱い人を一緒にして、放埒な人は意志が弱く、意志の弱い人は放埒であると考えるが、他の人々はこれらが別々であると言う。また、(五) 賢い人(*sapientia*)については、人々は時には、かれの

意志が弱いということはありえないと主張しながら、時には、だれかを指して、利口で賢い人なのに意志が弱い、などと言ったりする。さらに、(六) 意志が弱いということは、憤激しやすい人についても、名誉や利得によわい人についても、言われることがある。以上が、一般に言われていることである。」(一四五b八一—二〇)

もっとも、ここに記述されている「意志の弱さ」の規定は、必ずしも整合的でなく、意見の対立をも包含している。しかし、ひとまずそれは、まさしくそのようなものとして把握されなければならない。アリストテレスも、これらを列挙したうえで、対立する見解のそれぞれに根拠を見出してゆくことを、自らの仕事としている。たとえば、意志の弱い人と放埒な人が同一視されることがあるのは、両者が共に、主として食欲や性欲のかかわることがらにおいて劣悪な行為をなすという点が同一だからであり、それにもかかわらず両者が異なるという見解は、放埒な人はそのような行為を悪いとは思わないのに対して、意志の弱い人は悪いと思いついてしまふという相違に根拠がある。

とにかくわれわれの考察の対象は上記の如き意志の弱さである。したがって、ある意味では「悪いと知りつつ」なしたと言われる行為でも、たとえば右の条件(二)を満たしていないような行為は、意志の弱さとは言えない。たとえば、「世間の常識からすれば悪いことであると自分も知っているが、自分はべつに、してはいけないとは思わない」と考えて行為する人の場合は、かれの分別つまり考えに背いて行為しているわけではないので、放埒な行為ではあっても、意志の弱さによる行為ではない。

意志の弱い人が「悪いと知りつつ」なす行為とは、自分がなすべきではないと自分で思いつつ、やってしまう行為である。言いかえれば、かれは、自分の選択に背いて、つまり思案と意志に反して、行為してしまう。意志の弱さが、それ自体としても不条理なものと考えられるのも、まさにこの点である。

ソクラテスと意志の弱さ(一)

ところで、この意志の弱さという事実^①に明らかに撞着するのが、ソクラテスの、なにびともある行為を悪いと知りつつなすことはない、なすとすればそれは無知のゆえである、という主張である。

人はだれでも何が善いことを知りさえすれば善い人になり、善い行為をする、というソクラテスの知徳合一説、すなわち主知主義の主張は、意志の弱さを持ち出すまでもなく、いわば最初からパラドックス(常識に反すること)である。なぜなら、何が正しく何が不正であるかを知っていながら、不正なことであっても(あるいは不正なことこそ)利得になると考えて、あえてこれを行う人間はいくらでも居る——というよりむしろ、不正な人間とはほとんどすべてそうした人たちであると考えられるからである。そこでソクラテスは、まず、不正が利得にならないことを、証明してみせなくてはならない。^②

不正な行為が引合わないことを示そうというこの試み自体が、そもそも、容易なことではない。しかもそれは、不正行為が仮りにだれにも見付からず、刑罰と非難とを逃れおおせたとしてもなお、自分自身にとって有害であることを示そうというのであるから、殆んど不可能と言ってよいほど困難な事業となる。しかし、なるほど、もしそれが成功すれば、そして不正は不利であると人々が知るようになったとすれば、不正な人間の数はずいぶん減少するだろう。

だがここに、もう一つ別の問題が生ずる。かりにすべての人間が右のように考えるようになったとしても不正な行為が絶滅する日はやって来ないのではないか。というのは、人々の間には、なお、意志の弱さが残っているだろうからである。

不正は不利であると知る人は、不正な行為をなさない方がよいと心から思い、そう決意するだろう。だが、そのこ

となら、意志の弱い人だつて初めから知っており、決意もしているのである。それを知りつつ、そう決意した後で、かれは不正な行為を——快樂への欲望に負けて、あるいは苦痛に耐えかねて——なす。ソクラテスの知恵は、かれにとっては何の役にも立たない。悪い（不正であり、かつ、不利である）と知りつつこれをなす者が、まさしくここに居たのである。³ソクラテスの主張は、意志の弱さという常識的事実に矛盾する。

二

ところが、一筋縄でゆかないのが、いわば常識の常識たるゆえんである。はじめに見たように、賢い人が同時に意志の弱い人でもあるというのはおかしいという意見も、常識としてある。また、意志の弱さというもののそれ自体が、分別をもちながら無分別な行為をする、あるいは、知っていないながら愚かなことをするという不条理を、内に含む。とすると、このような人はやはり本当には知っていないのではないか、という疑惑も生じてくる。少くとも、かれはかれのなす劣悪な行為について、或る意味では知っているが或る意味では知らないのではないか。もとより常識は否定すべくもないが、ソクラテスにも一理はあるのではないか。

アリストテレスは、おそらく、ほぼ以上のように考えたと思われる。そして、意志の弱い人の知と無知を以下の如く分析してみせる。

意志の弱い人は、情念の虜になる前までは、ある行為が劣悪であること、なすべきではないことを弁えている（一四五b三〇—三二）が、ひとたび快樂への欲望がかれを支配すると、それがかれを盲目にし、無分別な行為へと駆

ソクラテスと意志の弱さ(一)

りたてる(一一四七a一五一一八)。しかし、悪夢から醒め、再び正気に戻ると、かれは自らのおかした行為の劣悪さに気付き(一一四七b六)、これを恥じて後悔の念にさいなまれることになる(一一五〇b三〇―三二)。この過程のうち、情念に支配されている間のかれは、言わば知っていて知らない状態にある。

知っていて知らないという状態は、事実、他の場合にも見られる、とアリストテレスは指摘する。それらのうち、いま、意志の弱さの解明に多かれ少なかれ妥当すると思われるファクターを挙げるならば、(一) 或る人が知識を所有していても、それを使用していないことがある。⁽³⁾ 例えば、幾何学者は、幾何学の知識を持っているが、行住坐臥それを用いて行動しているわけではない。(二) 三段論法による推論は大小二前提から成立つが、このうち大前提の知を所有しかつ使用していても、小前提のほうは所有しているだけで使用していないとき、⁽⁴⁾ 知っていて知らないということが起る。たとえば、およそ乾いた食物は健康によい(大前提)ということを知っていても、目の前にあるこのものが乾いた食物である(小前提)のに気付かないといった場合である。行為されるのは個別的なことであるから、このような場合、知に背いて行為するということが起りうる。(三) 或る状態が、知を所有している人が知を働かせることを妨げるということもある。睡眠、酩酊、狂乱などがこれである。意志の弱い人を襲う憤激や情欲なども、これらと同様なものと考えられる。このような状態にある人が知的な言葉を口にし、エムペドクレスの詩句を朗誦したとしても、それは知を働かせているしるしにはならない。習ったばかりのことを口にはするが、まだ知識が身についていない初学者も、これに似ている。

アリストテレスはこれらの考察を総合して、意志の弱さを次のように説明する。

「さらに、より事柄に即したかたちで意志の弱い行為を観察すれば、次のようになるだろう。〔一般に人間の行為

を成り立たせる三段論法において、そこに用いられる「見解の一つ」「大前提」は普遍的であり、他の一つ「小前提」は個別の、すでに感覚のはたらく領域のものにもかかわる。そして、これら「両前提」から一つの判断が生じると、この結論は、必然的に、或る場合（理論的な論証の場合）には心の中での肯定となるが、行動の領域にあっては、直ちに行為となつてあらわれる。すなわち、もし、すべて甘いものは味わうべきであり「大前提」、個別的な或るこのものが甘い「小前提」と判断されると、ここから必然的に、行いうる力をもっている人は、なにかに妨げられないかぎり、同時にこれを実行することになる。そこでいま「意志の弱い人の行為について言えば」、一方には「或るもの——たとえば畑に実っている果物——を」味わうことを禁止する普遍的な見解（例えば、およそ他人のものを味わってはいけないという見解）がその人の中にあるのだが、他方に、すべて甘いものは快く、このものは甘い、という見解がある場合、（そして後の方の見解が現実にはたらいっている場合、）そこにたまたま欲望が存在するならば、一方の見解は当のものを味わうことを避けよと語っているが、欲望がひとを引きずってゆく。なぜなら、欲望は身体の各部分を動かす力を持っているからである。したがって、或る意味での分別と見解とによって、意志の弱い行為が生ずるという結果になる。もっとも、この見解はただしい分別に反するのではあるが、それ自体として反するのではなく、付随的にそうなるのである。というのは、「味わってはいけないという」正しい見解に反対するのは「味わうべしという」欲望であつて、「快いという」見解そのものではないからである。」（二一四七a二四一b三）

これを図示すると次のようになる。

ソクラテスと意志の弱さ(一)

A 正しい分別

(普遍的な見解) 「すべて他人のものは味わってはいけない」

(個別的な見解) 「この果物は他人のものである」

(結論) 「この果物は味わってはいけない」 → (行為) 「この果物を味わうのをやめる」

欠如

B 擬似分別

(普遍的な見解) 「すべて甘いものは快い」

(個別的な見解) 「この果物は甘い」

(結論) 「この果物は快い」

+ (欲望) 「快いものは味わうがよい」 → (行為) 「この果物を味わう」

これをもとにアリストテレスは、意志の弱い人における無知を、次のように理解する。

「[行為の推論における] 最終の前提 [小前提] は、感覚されるものにかかわる見解であり、それが行為を決定するのだが、この見解を、かれは、情念の中にあるとき、持っていないか、あるいは持っているとしても、それは、知っているという意味においてではなく、ちょうど酔っ払いがエムペドクレスの詩句を朗誦するように、ただ言葉を語っているというだけの意味においてである。そして、最終の項 [小前提の主語の位置にある項] は普遍ではなく、ま

た普遍と同様に知識的でもないと考えられるために、ソクラテスの求めていた帰結が生じてくると思われる。すなわち、本来の意味で (*euphoi*) 知識 (*erichun*) であると考えられるものが現存するのに意志の弱さが生ずることはなく、また、このような知識が情念によって引き廻されることもないからである。引き廻されるのは感覚的知識である。」(一一四七b九—一七)

さて、われわれの探究の主題は漸くここから始まる。アリストテレスは右の分析において、意志の弱い人がどの点で知っており、どの点で無知であると言っているのか。また、「本来の意味で知識であると考えられるものが現存するのに意志の弱さが生ずることはない」とかが言うとき、その「本来の知識」とは何か。これがわれわれの問題である。

三

「本来の知識」(*euphoi erichun*) について、研究者たちの意見は、ほとんどすべて一致している。すなわち、これによれば、「本来の知識」とは普遍についての知識にはかならない。⁽⁸⁾そして、勿論、これには有力な理由がいくつもある。その中でも(一)最大の理由は、アリストテレスが繰り返し語る「知識は普遍についてある」という思想であろう。知識の対象となるのは普遍的なものであって、個別的なものには知識がなく、感覚がこれをとらえる、ということは、われわれの『ニコマコス倫理学』の中にも明言されており、他の著作でも何度となく言われている。⁽⁹⁾この事実、この理由がこれだけ単独でも極めて強力であり、もはや前後の文脈を検討する手続きを無視してしまつて

ソクラテスと意志の弱さ(一)

よいと思わせるほどの力をもつ。だがさらに、右の解釈には(二)コンテクストの上からの理由も、立派にある。それは、直前の、「最終の項は普遍ではなく、また普遍と同様に知識的(ἐπιστημονικός)でもないと考えられる」(一四七b一三—一四)という句である。これは言いかえれば、「普遍こそ知識的である」ということ以外では、絶対にありえない。さらに屋上屋を重ねるならば、(三)最後の「[情念によって引き廻されるのは本来の知識ではなくて]感覚的な知識である」(一一四七b一七)という結語がある。これによれば、本来の知識とは感覚に対立するものである。そして、感覚の対象は個別のものであるから、本来の知識の対象は普遍であることになる。こうして、この解釈は未だかつてほとんど疑われたことがない。

ところが、実は、この読みからは一つの困難が生ずる。すなわち、前後の辻褄が合わないところが出てくる。それはこうである。アリストテレスによれば、「本来の知識が現存しながら意志の弱さが生じることはない」(一一四七b一五—一六)。しかるに、右の解釈によれば本来の知識とは普遍についての知識であるから、それをここに代入すると、普遍的な知識をもっていれば意志の弱さが生ずることはない、ということになる。それは言いかえれば、意志の弱い人には普遍的な知識が欠けているということであろう。ところが、このことは、アリストテレスが直ぐ前で言っていたことと矛盾する。なぜなら、そこでは、意志の弱い人に欠けているのは「最終の前提」、つまり「感覚されるものにかかわる見解」であると言われており(一一四七b九—一二)、それは個別についての知識にはかならないからである。しかも、もう少し前では、さらに積極的に、或るものを味わうことを禁止する「普遍的な見解」が、意志の弱い人のうちに、あると言われていたのである(一一四七a三一—三二)。

すなわち、行為の三段論法において、大前提は普遍についての判断、小前提は個別についての判断であるが、意志

の弱い人には大前提だけがそなわっており、小前提が欠けている、したがって意志の弱い人は普遍的な知識はもっているが、個別的な知識をもっていない——これがアリストテレスの説明であつたのに、「本来の知識」を普遍的な知識と解すると、話はすっかり反対になつてしまふのである。クック・ウィルソン、ステュワート、R・ロビンソンといった人たちは、この難点に気付いていた。⁽¹⁰⁾

矛盾は、本来の知識とは普遍についての知識であるという考え方と、意志の弱い人に欠けているのは個別についての知識であるという考え方との間に生じたのであるから、そのどちらかが間違つていたと、まず考えられる。しかし、そのどちらも、蓋然性はきわめて小さい。後者について言えば、アリストテレスは本章で少くとも三度繰返してこれを示唆ないし明言している（一一四六b三五——一四七a一〇、一一四七a三一——三二、一一四七b九——一二）。そして前者については、既に見たとおり、言わばアリストテレス哲学の基本概念である。

そこで残された道は、二本の角の間をすり抜ける手である。つまり、右の二つの見解はどちらも正しく、しかも実は互いに矛盾してはいないのではないか。ステュワートによれば、本来の知識とは普遍知であり、意志の弱い人に欠けているのは個別知であり、したがって、意志の弱い人は本来の知識を持っているのである。それにもかかわらずかれが意志の弱い行為をしてしまふのは、かれが個別知（小前提）を持たないために、折角の普遍知（大前提）が行為の場面に力を及ぼしえないからである。「本来の知識が現存しながら意志の弱さが生ずることはない」とは、「本来の知識を持っていれば」という意味ではなくて、「本来の知識がもしも現場にはたらくならば」という意味に読むべきである。普遍的な知識（大前提）がもしも行為の現場に直接はたらく性格のものならば、意志の弱い行為は生じなかつたろう。しかし普遍知は、本性上、直接には行為の現場に関係しない。そして、まさにそれゆえに、感覚的な知識と

ソクラテスと意志の弱さ(二)

ちがつて、情念や行為に影響されることがなく、「引き廻されることもない」(一一四七b一六一一七)。

ステュワートのこの解説は高度に技巧的である。そして、こう読めばたしかに矛盾は解消する。だがその代りに、別にいくつもの無理が現われる。なかでも最大の不合理は、この読み方によると、本来の知識は行為に関係しないと、他ならぬソクラテスが主張したことになってしまふ点であろう。ソクラテスの主張は、知識が何ものにもまして強力であるとするものであったと思われるのに⁽¹²⁾。

原文の文脈に即して、これを見よう。ソクラテスの主張はもともと、「知識が内在するのに他のなにか(たとえば情念や欲望)が支配力を振り、知識を奴隸のように引き廻すなどとは奇怪である」(一一四五b二三―二四)というものであった。われわれが問題とする文章は、「本来の知識が現存するのに意志の弱さが生ずることはなく、またこのような知識が情念によって引き廻されることもない」(一一四七b一五一―一七)となっている。これら二者の対応は、まず一見して明らかであるが、さらに、後者がまさしく「ソクラテスの求めていた帰結」(一一四七b一四―一五)として語られていたことから、これら両者は同一の内容をもつと考えるべきであろう。とすれば、「知識が現存する」は「知識が内在する」とほぼ同じ意味に、つまりほとんど置き換え可能なものとして解されるべきであろう⁽¹³⁾。したがって、両者のいずれにおいても、少くともその主旨は、知識があれば意志の弱さが生じないという点、逆に言えば、意志の弱い人には知識が欠けているという点にある。ソクラテスのこの主旨は、たといアリストテレスが「内在」と「現存」という語を何らか注意深く使い分けているとしても、一貫して不変でなければ、議論の大筋が通らない。したがって、意志の弱い人も本来の知識を持っているとするステュワートの解釈は、原文に即していないと言わなければならない。

こういった無理を自覚してか、ステュワートは、右の解説とは別に、原文の伝承そのものを疑って、新しい校訂を提案した^⑥。問題の文章の小部分を改訂（一一四七b一六 *παρὸν τὴν ἐκείνην* → *κατὰ τὴν ἐκείνην*）することによって、「本来の意味で知識であると考えられるものを情念が打ち負かすことはなく、またこのような知識が情念によって引き廻されることもない」と読み改めようとするのがこれである。こうしてしまえば、無理に技巧的な読み方をしないで済むことは勿論、初めのディレンマそのものを抹殺することができる。なぜなら、いま、本来の知識を普遍的な知識と解することにしても、「普遍的な（大前提の）知識をもっていれば意志の弱さが生ずることはない」というあの都合な命題は、もはや出現しないからである。

最小の改竄によって最大の効果をあらわすこの妙案——アリストテレスの文体を多少ふやけたものにしてしまうにしても——は、同じディレンマに悩んだR・ロビンソンによっても採用された^⑦。しかし、この新版も、当然のことながら、事柄の理解においては、すでに見たステュワートの見解以上のものをもたらしはしない。本来の知識とは普遍的な知識すなわち大前提の知識であり、これはそれ自体として行為と情念に力を及ぼすことも及ぼされることもないというこの解説は、たしかに「本来の知識」を不変不動のものにはするが、同時に、無為無能なものにしてしまう。われわれはこれを以てアリストテレスのソクラテス理解とするわけにはゆかない。

四

こうして、ディレンマの間をすり抜けようとする試みは失敗する。そして再び、われわれはもとの難問へと投げ戻

ソクラテスと意志の弱さ(二)

される。本来の知識は普遍についてあるとしてはならないのか、それとも、意志の弱い人に欠けているのは個別についての知であるとしてはならないのか。それはこうも言いかえられる。意志の弱い人には本来の知識が欠けているが、それは普遍についての知識であるか、それとも個別についての知識であるか。

ここでわれわれが信を置くべきは、いわゆるアリストテレスの思想なるものではなく、アリストテレスの言葉にであるとすれば、天秤はやや後者に傾くように見える。既に見たように、われわれの『ニコマコス倫理学』第七卷第三章においては、意志の弱い人が個別的知識を欠いていると繰返し語られているからである。だが、それでは、ここから直ちに、本来の知識とは個別的知識であると考えてよいかとなると、やはり話はそう簡単ではなさそうである。すでに見たところによれば個別の知識とは小前提の知識と考えてよいが、たとえば「この果物は他人のものである」といった知識が、なぜ本来の知識なのであろうか。しかもなぜ、「およそ他人のものは盗んではいけない」という大前提の普遍的な知識以上に、そうであるのか。われわれはまだ少しもその言われを見出すことができない。

しかしとにかく、本来の知識とは意志の弱い人に欠けている知識であることは、すでに確められている。では、これに欠けているのは個別的知識ではなかったのか。ここで気付くのは、アリストテレスが、意志の弱い人は個別的知識を欠くと単純には語っていなかったことである。「最終の前提「小前提」に当る見解(*doxa*)を、かれは持っているか、あるいは持っていたとしてもそれは知っている(*epistagadai*)」という意味においてはではなく、ただ言葉を語っている(*apein*)」というだけの意味においてである」(一一四七b九—一二)というのが、アリストテレスの言い方であった。

よく注意して見ると、ここでは、意志の弱い人の状態として、(一)小前提に当る見解を所有していない場合と、

(二) その見解を所有してはいるが、知っているとは言えない場合とが区別されている⁽¹⁸⁾。そして、後の場合においても意志の弱さが生じると考えられている。ということはつまり、小前提に当る見解を所有していても、意志の弱さは生じうるのである。ここからすると、意志の弱い人に欠けているのは小前提であると、単純には言えないことになる。かれに欠如しているのは、厳密には、小前提の所有ではなくて、それを「知っていること」であると言わなければならない。(この、「知っていること」は、さきの二つの場合のどちらにも欠けている。)

本来の意味での知識とは、まさにこの「知っていること」を指していると思われる。このとき、知っているか否かは、何について知っているかよりも、如何なる仕方で行っているかによって決まることになる。それは、知識の所有と使用の別である。このことは、今にしてみれば、実は第七卷第三章の最初から一貫して、アリストテレスが分析してみせようとしていたことに他ならない。知識を所有して (*ἐκείνη* 一一四七 a 七) いる状態に対して、それを使用して (*ὑποθέμενος* 一一四六 b 三二、一一四七 a 二、a 一二) おり、現に働かせて (*ἐνεργεῖ* 一一四七 a 七、a 三三) おり、見て (*θεωρεῖ* 一一四六 b 三三、一一五二 a 一四—一五) いる活動がある。「知っている」(*ἐπιστάσθαι*) とは、このように認識活動していることを指す。そして「本来の知識」(*ἐπὶ τὸν ἐπιστήμην*) とは、その同じことの、抽象名詞による表現として理解される。

アリストテレスが、意志の弱い人の無知——あるいはむしろ不知——を、結局のところこのような認識活動の欠如として扱っていたことは、意志の弱さを論じた最終章(第七卷第十章一一五二 a 一四—一五)にこの規定が見られることから明白であると思われる。またわれわれ自身も、意志の弱さゆえの行為を指して、「欲に目が眩んで」といった表現をする。良心の視力を、能力としては所有していながら、情念のゆえに一時的な盲目状態に陥るという意味

ソクラテスと意志の弱さ(一)

であろう。こうしてアリストテレスは、意志の弱い人が、或る意味では知っているが本来の意味では知っていないことを示した。そのような人は、本来の意味では、知りつつ悪をなすとは言われない。意志の弱さの原因はやはり無知にある。ソクラテスの主張はこうして弁護されたのである。

しかし、これは問題の解決ではない。むしろ新たな問題の始めである。われわれの考察は、現実の認識活動としての知識を発見した。しかし、知識は、或る瞬間において働いているというただそれだけのことで、本来の知識なのだろうか。それは次の瞬間には働かなくてもよいのか。われわれは、眼を開いたり閉じたりするような仕方では、知り知らなかったりするのか。

意志の弱い人は、意志の弱い行為をなす直前までは本来の知識をもっており、本来の知識を失うと同時に意志の弱さに陥るのだろうか。そして、本来の知識が回復するとともに後悔が生ずるというわけだろうか。たしかに、この場合にも、本来の知識と意志の弱さが、同時には存在していないと言いうるであろう。従ってそのとき、「本来の知識が現存するのに意志の弱さが生ずることはなく、この知識が情念によって引き廻されることもない。」

だが、これがソクラテスの知識か。それだけの強さと支配力を、これは具えているか。ただ単に、本来の知識と意志の弱さとが共存しないというだけでは、はじめに本来の知識が現存していても、そこに情念の波が押し寄せると、この知が退き、次いで意志の弱さが継起する、ということがありうることになるだろう。だがもしそうなると、それはすでに、或る意味で、「本来の知識が現存するのに意志の弱さが生ずる」ことではないか。否むしろ本来の意味で、「この知識が情念によって引き廻される」ことではないか。

もしもわれわれが知識を単なる現実活動としてのみ把握し、本来の知識とは何らかの見解を心に意識していることであると考えると、あるいは、何らかの感覚を現に感じていることであると解すると、右のような結果が、そしてさらに奇妙な帰結が、生ずると思われる。喉元過ぎれば熱さを忘れるという諺がある。失敗に懲りたと思いきや、いつの間にかそれを忘れ、またぞろ同じ失敗を繰り返す意志の弱さを嘆いたものと同じことができる。しかしそのこれも、熱さが喉に感じられているうちは、これを忘れてはいない。胃潰瘍持ちの酒飲みも、胃の痛みが続く間だけは節制を守る。だが、この、続いている胃の痛みのようなものが——たしかにそれは現にはたらいっている知覚ではあろうけれども——本来の意味での知識なのであろうか。あるいはまた、何らかの見解の現存——それを心に想い浮べていること——が知であり、見解の潜在——忘れていること——が不知であって、ひとは、ある見解を想い浮べたり放念したりするたびに、本来の意味で、知者になったり無知な人間になったりを繰返すのだろうか。胃の痛みが襲って来たり、退いてゆくたびに、意志の強い人になったり弱い人になったりするのだろうか。

誤りはどこにあったのか。アリストテレスが、意志の弱い人には現実活動としての知が欠けていると考えたのは、おそらく正しかったと思われる。また、意志の弱い人に本来の知識が欠けているというのも、勿論、間違っていないかった。誤りは、われわれが、「本来の知識」を現実活動の知と同一視してしまった——かつてそれを小前提の知と同一視してしまったように——ところにある。そしてその原因は、意志の弱い人に欠けているものをそのまま本来の知識と同一視したところにある。かれには間違いなく本来の知識が欠けているのだが、意志の弱い人に欠如しているものならば何であれ本来の知識であるのではない。

ソクラテスが、「知識が内在するのに他のなにかが支配力を振い、知識を奴隸のように引き廻すなどとは奇怪なこ

ソクラテスと意志の弱さ(一)

と」と言ったその知識を、アリストテレスは「本来の知識」と呼んだ。そのときアリストテレスは、かれ流に、「内在」を「現存」と言い換えた。しかし、「現存する知識」は、おそらく、決して現存したりしなかったりする知識ではなかった。それはむしろ、自らを現存させる知識、すなわち、自らが現存することの原因を自らの中に有しているような知識であつたのではないか。なぜなら、さもなければ、あの胃の痛みのように、知識の現存と活動は偶然に生じたり生じなかったりするものとなつてしまふからである。したがつてまた、ソクラテスの求めていた知識ではなくなつてしまふからである。

本来の知識とは何か。この問を、アリストテレスの、意志の弱さをめぐる論述に即して追跡してゆく道程が、さらにいくばくか、われわれに残されているように思われる。

(つづく)

〔註〕

(1) cf. Arist. E. N. VII 2. 1145b 26-27.

(2) たとえば、プラトンの『ゴルギアス』で、ポロスと問答するときのソクラテス。証明らしきものは、Pl. Gorg. 474C-475E. また、プラトンの『国家』は、その全体がこの問題への証明になつていると見られる。cf. Pl. Resp. II. 357A-367E. esp. 367D 「△正義△を讀えるにあつても、まさにこの肝心な点を讀えてください。△正義△はそれ自身の力だけで、その所有者にどのような利益を与える (δωδινον) の

か、逆に△不正△はどのような損害を与える (βλάπτει) のかを、示してください。」(藤沢令夫訳)

(3) ただし、アリストテレスが典型として考えている意志の弱い人は、ある行為を「劣悪」(ποῦρα 1145b 12) と知りつゝなす者であつて、必ずしも「不利」と知りつゝなすのではない。劣悪なこととは例えば「不正なこと」(cf. 1151a 10 ἀδικον) であるが、意志の弱い人はこれを、それが有利であるか不利であるかはともかく、してはいけなと思つてゐる (cf. 1152a 17 ἢ τὰς ἡμετέρας ἀρετάς)。

- (4) 以下に見られる、アリストテレスの四とおりの説明(一、二、三、および、1147a24-1147b19)の相互関係について、議論がある。BURNET (p. 299, 301 etc.) は、一―三は準備の考察で、四が真の解答であるとする。その根拠は、四が *quærens* な説明と言われている点にある。これはここでは「心理学的」という意味であり、従って科学的であり、従って真の説明であると、かれは考える。ROBINSON (p. 150-151) は、これに対して、*quærens* な、従って自然科学的な説明は必ずしもつねにすぐれた説明ではないとして、むしろ一―三を「論理的な」説明として重視する。SANTAS (p. 181-182) は、一―三を「知っていて知らない」ことがどうして可能かを説明したもの、四を「意志の弱さ」についての説明と考える。小論の理解は本文に示す通りで、大略、SANTAS に近す。
- (5) cf. Phys. VIII. 4. 225a33, De An. II. 1. 412a22, Metaph. IX. 6. 1048a32. 幾何学者の例は原文になが、cf. De Sensu 4. 441b22, Gen. Anim. II. 1. 735a9.
- (6) ここでアリストテレスは、大前提と小前提の各々について、所有と使用を区別しようとしている。したがって、都合四とおりの場合が区別できるが、その各々の意味を具体的にどう理解したらよいかが難しい。ここにはいろいろ問題があるが、一応、本文のように理解しておく。

- (7) この、正しい分別の大前提は、従来、大抵は、「すべて甘いものは健康に悪い」といった例で考えられてきた。従って、正しい分別の小前提は、擬似分別の小前提と同じもの、すなわち「このものは甘い」という命題であると考えられてきた。
- しかし、そう解すると、「[意志の弱い人は] 最終の前提「小前提」を持つていないか、持つていないとしても、それは知っているとという意味におおてではない」(1147b9-12) というのが理解しにくくなる。なぜなら、最終の前提が「このものは甘い」というものであるとすると、これを、意志の弱い人は持つており、かつ働かせている (*καὶ τὴν ἐνέργειαν* 1147a33) からである。この難問は長い間研究者たちを悩ませてきた (cf. WALSH p. 106ff.)。たとえば JOACHIM (p. 228, l. 20-24) は、意志の弱い人は小前提を持つてはいても、それを大前提に結びつけて理解してはいないのだと説明し、SANTAS (p. 183-184) は G. Vlastos の示唆に従って、「最終の *apôdeixis*」とは最終の前提ではなく、最終の命題、すなわち結論のことであって、これを意志の弱い人は持つていないと解釈することを提案した。
- しかし、「味わりことを禁止する普遍的な見解」を、最初に挙げたような命題として理解しなければならない理由は、実は存在しない。たとえば「他人のものを味わってはいけない」といった命題も、たとえば本論に示したような連関の中

ソクラテスと意志の弱さ (一)

では、禁止的見解として働きうる。「甘いもの」という表現は、正しい分別の大前提に含まれなくてよい。ただ、当の事例において、或る「このもの」が、事実上、たまたま、甘いものであり、かつ他人のものであるように連関していればよい。(より正確に言えば、事実としてではなくて、意志の弱い人が正しい分別をとり戻して後悔するとき、そのかれの分別の中で、そのように意味連関していることが必要十分である。)このとき、正しい分別の小前提は、「これは他人のものである」となる。これは擬似分別の小前提「これは甘い」とは異なっている。

なお、この直前(1147a29-31)で「もしすべて甘いものは味わうべきであり、このものが甘いと判断されると……」という推論がある。この例からすると、正しい分別の大小両前提はこれに類似のものでなくてはならないように見えるが、そうではない。この推論はむしろ、擬似分別(と、それによる意志の弱い行為)を誘発する原形式として提示されたものと見られる(cfr.「したがって或る意味での分別と見解とによつて意志の弱い行為が生ずることになる」(1147a35-b1))。正しい分別は、むしろこれを妨げる側のもの(καὶ οὐκ 1147a32 cfr. 1147a30-31 καὶ καθόλου)ゆえ、その大小両前提の命題は別のものさあつてゐる。

(8) 主要なものを挙げると BURNET p. 305 'ἐνστικτὸν in

the proper sense, all the terms of which are necessarily καθόλου' GAUTHIER II. p. 617 'La science au sens propre, c'est la connaissance des universaux et des choses qui sont nécessairement ce qu'elles sont (cf. plus haut, VI. 6. 1140b31)'. 註を引く STEWART vol. II p. 161, 162. ROSS Oxford Translation, footnote to 1147b15-17: Aristotle p. 224 note 2. ROBINSON p. 152. WALSH p. 104. SANTAS p. 185 など JOACHIM 註 p. 229 'scientific knowledge' など DIRMELIER s. 482 は明言せず。

ただし、これらの問題とあつて、加藤 p. 427「その「何であるか」(本質・「般者」)が把握をれつゝ個別の知識の「こと」のみは異彩を放つ。

なお、研究者たちの多くは、「本来の知識」が普遍知であることを自明と考えるために、これについてコメントするのをとやまらしない。ましてその根拠を示すことは稀である。したがって、本論に列挙する「理由」は筆者の推測による。

(9) E. N. 註を引く VI. 6. 1140b31, VI. 8. 1142a20-30, X. 9. 1180b15-16 (τοὺς κοινούς), ibid. b22-23, E. N. 外註 An. Post. I. 33, 88b31, I. 4, Phys. I. 5. 189a5, De An. II. 5. 417b22, Metaph. III. 6. 1003a15, V. 11.

1018 b 33, XI. 1. 1059 b 26, XI. 2. 1060 b 20, ㄱ의 聖°

- (9) Cook Wilson, J., On the Structure of the Seventh Book of the Nicomachean Ethics, 1879, republished with Postscript 1912, parag. 66 (STEWART vol. II. p. 163 ㄹ 448°) STEWART *ibid.* ROBINSON p. 152-153.
- (11) STEWART vol. II. p. 161-164.
- (12) cf. 1145 b 32 *ἐπιστήμη μὴ εἶναι κοίτην*.
- (13) 原文は τὸ καθόλου. これを「概念」とすれば、1145 b 24 *ἄλλο τι* の対応はより緊密になる。もしも「本来の知識」が「節制ある人 (*ὁ σώφρων*) ないしは賢人 (*ὁ σοφός*)」のものであると理解することができなければ、ここは「本来の知識が現存することに情念が生ずることはない」と読めるようであるだらう。節制ある人に「過度の欲情は生じないからである (cf. 1146 a 11-12, III. 2. 1191 a 11-20)°
- (14) 1147 b 15 ὁ γὰρ ἔστι SMYTH §2808, 2809 ὁ Explanatory (or prefatory) γὰρ と解するのがよく思われる。
- (15) ㄱ의 ㄹ° cf. 1145 b 22 *ἐπιστάμενος*, *ibid.* b34-35 *ἐπιστήμην εἰσέρτα*.
- (16) STEWART p. 163-164. ステewart 自身は「改訂の理由として、われわれが述べた「無理」とは別の理由を挙げている。しかし、改訂が、かれの理解方式に好都合なようになされたことは否定できないと思われる。cf. HARDIE p. 290

北大文学部紀要

But Stewart feels strain of this explanation....

- (17) ROBINSON p. 152-153. GAUTHIER (II. p. 617) もこれを採用するが、より些細な理由からである。なお他にも採用者は多い。
- (18) 本論では二つの「場合」としたが、これは二つの「見方」と考えるべきかも知れない。註(6)でも触れたが、小前提の所有と使用とのそれぞれが具体的にどう理解するべきかは、残された課題である。
- それはさておき、このあたりで、アリストテレスがかれの流儀で *δόξα* (見解) と *ἐπιστήμη* (知識) を分離しようと目論んでいることが窺われる。かれは、この区別——或る形で——を前に一度否定してみせた(1145 a 31-1146 a 4, 1146 a 24-31) けれど。
- (19) しかし、いま、以後の探究のために一言しておくならば、アリストテレスの考える本来の知識とは、おそらく、何らかの意味で、個別について、現実活動としての知識であるには違いない。問題はそれをどう理解するかである。cf. De An. II. 5. 417 a 28-29 ὁ δ' ἦδη θεωρῶν, ἐπὶ θεωρίᾳ αὐτοῦ καὶ κυρίως ἐπιστάμενος τοῦτο τὸ Α.

引用文献

〈加藤〉 加藤信明訳『ニコマコス倫理学』(アリストテレス全集13) 岩波書店 一九七三

〈BURNET〉 J. Burnet, The Ethics of Aristotle, 1900, London.

〈DIRLMEIER〉 F. Dirlmeier, Aristoteles — Nicomachi-sche Ethik, 1960, Berlin.

〈GAUTHIER〉 R. A. Gauthier et J. Y. Jolif, Aristote — L'éthique à Nichomaque, 1970, Louvain.

〈HARDIE〉 W. F. R. Hardie, Aristotle's Ethical Theory, 2nd ed., 1980, Oxford.

〈JOACHIM〉 H. H. Joachim, ed. by D. A. Rees, Aristotle — The Nicomachean Ethics, 1951, Oxford.

〈ROBINSON〉 R. Robinson, 'Aristotle on Acrasia', Ch. 7 of the "Essays in Greek Philosophy", 1969, Oxford.

〈SANTAS〉 G. Santas, 'Aristotle on Practical Inference, the Explanation of Action, and Akrasia', "Phronesis" vol. 14, 1969, p. 162-189.

〈SMYTH〉 H. W. Smyth, Greek Grammar, 1920, Cambridge, Mass.

〈STEWART〉 J. A. Stewart, Notes on the Nicomachean Ethics of Aristotle, 2 vols., 1982, Oxford.

〈WALSH〉 J. J. Walsh, Aristotle's Conception of Moral Weakness, 1963, New York.